

「終わりのしるし」に関するマタイの「三つの例え話」を総合的に検証する

「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られて世の終わるときには、どんな徴があるのですか。」(24:3) という質問に対して語られた一連の話は25章の最後まで続きますが、この3節から始まった「終わりの日のしるし」の話は、24:31までで一通りの区切りが付けられて終わります。

そして、それまでの話しのまとめとして「いちじくの木のとえ」が語られます。

「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらすべてのことを見たなら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」(24:32-35)

このあと24:36以降は、キリストの勧告です。

「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。(24:36)

それはノアの日と同様です。特にどんな特徴が同じなのでしょう。

人々は日常生活に没頭していて、洪水に襲われるまで「何も気がつかなかった」という点です。一見何の違っても見られない、日常の光景である、畑の男、臼をひく女、一人は選ばれ他は捨てられる。

「だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入れさせはしないだろう。だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」(24:42-44)

その日は誰も知らないのだから、いつなのか分からないのだから、思いがけない時なのだから、目覚めていなさい、用意をしていなさいと、何度も繰り返し述べておられます。

しかしそれでもまだ十分ではないと思われたのか、さらにこの後、三つの例え話によって、このことを肝に銘じるように諭されます。

その目的の全ては「その日を知らないのだから、目覚めて、見張っていなさい」の一言に尽きます。この一点についてこれだけ、多くの例えと多くの言葉が語られているのは異例のことに思えます。

それで、「奴隷、10人のおとめ、タラント」の3つのたとえを含め24:36から25:30までの部分が、「目覚めているように」というキリストの勧告として「ひとまとまり」の内容を構成しています。

まず「忠実な僕と悪い僕のたとえ」は前節の「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」ということをも銘記させる目的で、語られています。「その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来る」(24:50)が、この例えの趣旨であり、「全財産を管理させる」(任命して全ての持ち物を司らせる)事に注目させたいわけではありません。

ところで、これは例え話ですから、「主人」は人間です。不意に戻って、実際にその目でそうしているところを見る時、誰が忠実に働いているかを知り得ます。

「僕」はいつでもそうしているなら、いつ戻られても、大丈夫です。

しかし、この例えの実体は、主人はキリストであり、天において神の右におられ、戻られる前から、すべてをご存じです。これが、例えと実体の大きく異なる点です。

主人が戻られる1時間前まで、何年間も毎日ずーと忠実だった僕が、ちょっとしたことで、仕事を放棄して遊びに行っている最中に戻られたらどうなるのでしょうか。

あるいは全く逆の場合はどうでしょうか。つい1時間ほど前には唯の一度も仕事をしたことのない僕が、ちょっとした気まぐれで、食物を与えていたら、たまたまその時に主人が戻られたらどうなるのでしょうか。

「たとえ」の上だけで考えれば、ともかく主人は戻った時にそうしているのを見るか見ないかで僕を裁定することになります。

つまり、いかに不意に思いがけない時であったとしても、抜き打ちしたある一時点において見る出来事だけでは真の忠実さも不忠実さも測れるものではありません。

本当に誰が忠実だったかは、実際の場面では、いつ戻るかに関係なく、イエスは正しく判断できるのです。ですから、いつ不意に戻って来られて、見られても良いようにしていなければという思いを働かせる事が結果的に、いつも目覚めさせる要素になる故に、イエスはこうした表現で語っておられるのです。

つまり、この例えは本当の意味での「忠実さや思慮深さ」を知る、知られる方法、或いはそのような者として認められるための基準や、実際の採用方法について述べているわけではないということです。

これは、飽くまで例え話であり、「忠実」「思慮深さ」という表現は、単に「いつでも目を覚ましている」ことの重要性を鋭く認識しているという表現の代わりに使われていると言えます。どこまでいっても、この「忠実で思慮深い奴隷」についての記述の趣旨は「目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。」にあります。それ以上の勝手な意味づけは「書かれている事を超えた」ものになるでしょう。

この「僕」の例えの中で、「忠実で賢い(思慮深い)」という表現が出て来ますが、実際に、「忠実さ」「思慮深さに」については、続く例えの「タラントのたとえ」と「10人のおとめのたとえ」の中で、その意味するところが示されています。

「タラント」のたとえには「忠実な良い僕」と「怠け者の悪い僕」が登場します。

「10人のおとめ」のたとえの5人は「賢い(思慮深い)」後の5人は「愚かな」おんなです。

この「忠実」「賢さ」という二つの特質の意味する所についての説明が、後の二つの例えの役割分担と言えるでしょう。

「思慮深さ」の意味するところ

「10人のおとめ」は全員が眠り込んでしまうので、継続的な忠実さという点では、10人全員に異なることはありません。

しかし、「あらかじめ」（これが重要です）「油」を用意しているかいないかが、「賢いか愚かか」の分かれ道です。

実際の成就で考えて見ますと、彼女らはキリストの花嫁候補で、「終わりの時（臨在時）」に地上で、その時を迎える（自称）クリスチャンたちのことです。「復活組」はこれに当てはまりません。

ということは、彼らは「携挙」に与る人々の事だと言うことが分かります。

（これに付いては、この例えに限らず、「食物分配奴隷、10人おとめ、タラントのいずれのたとえでも同様で、花婿到着時、主人帰宅時は終わりの日で、その時生きているクリスチャンに当てはまります）

「生き残っているわたしたち生きている者が、彼らと共に、雲のうちに取り去られて空中で主に会い、こうしてわたしたちは、常に主と共にいることになるのです。」（テサロニケ第一 4:17）
（この聖句に関する詳細レポートは「68 キリストの臨在時に実際に目にする事柄とは」をご覧ください。）

「10人のおとめ」はこのキリスト（花婿）が地に降りてこられるときに、「空中に取り去られる」ために迎えに行くことになっています。

この時は「その苦難の日々の後、たちまち太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子の徴が天に現れる。」（24:29,30）と言う、史上最大の闇の時であり、まさしく「真夜中」です。

だからこそ、乙女たちは「ともしび」をもって迎えにゆくのです。

しかし、それは二度とないような未曾有の大患難の直後であり、その艱難や迫害の最中で、「ずっと見張っていなさい、目覚めていなさい」と言われていたにも関わらず、彼女らは全員眠り込んだ状態に陥るということです。

「さあ花婿だ、迎えに出なさい」という声によって眠りから起こされた時に、「思慮深かった」クリスチャンだけが、それ以前から用意周到に保持していたものの故に、直ちに事態を把握し、忠節を保てる故に、花婿を迎えることができるということでしょう。あらかじめ備えのなかったクリスチャンは、恐らく、この時忠節を保つ事ができない故に退けられることになるというのが、現実の成就であろうと考えられます。

そしてこの例えの締めくくりとして最後に「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」と付け加えられています。

「忠実さ」の意味するところ

この例えでは「ある人が僕たちに財産をゆだねて外国に旅行に出る」ということから話しが始まります。

目的もなく、資産を委ねることなどないでしょうが、たとえを読む限り、「商売をするように」とか、そのゆだねたものを「増やすように」という指示など全く与えていません。

ゆだねた額は5, 3, 1 タラントと違いがあり、各自の能力に応じたものですが、どんな能力なのかは示されていません。

主人が旅行から戻り僕たちと精算しますが、2, 5 タラントの僕は同額を儲けたと報告します。主人は喜び「よくやった、善良で忠実な奴隷よ。あなたはわずかなものに忠実であった。」と「忠実」を繰り返して評価し、さらに多くのものを管理させるとします。

しかし、1 タラントの僕は、ただ保存しておいてその1 タラントを返します。この者に対する評価は「怠け者（無精）で悪い僕」とされます。「忠実」の反対語は「不忠実」です。「怠け者」の反意語は「勤勉」です。

これらの僕は、「食物分配奴隷」の例えと違い「言われた通り、していたとか、していなかった」と言うことではありません。

事実何の具体的な指示も命令も与えられていません。2, 5 タラントの僕が単に「勤勉だった」と評されたのではなく、「忠実であった」と言われたのは、彼らは、主人の意向、関心事を知っており、何も言われなくても主人のために自ら儲けようと努力した故にそうした表現で評されたのでしょう。

また、儲けるためには継続的な努力が必要とされ、戻る直前だけ、そのように取り繕うとしてもできるものではありません。

例えを読む限り、1 タラントの僕は、預かった資金を、着服したわけでも浪費したわけでも紛失したわけでもありません。「怠け者」には値するとしても、しかし、殊更に悪事を働いたワケでもないのに、「悪い僕」と裁定されます。

彼は「精算の時を予期しており、（恐らく、盗られないように、なくさないように）「地の中に隠して」おきます。

主人が戻られた時、即返却する用意ができていますので、その認識があり、忘れていなかったことが分かります。

しかし、資金を託された者として、何かしらが期待されていると考えるのは当然のことでしょう。何も指示されなかったからといって、「戻ったら返す」という以外、主人の意向や関心事などには全く関心が無くまた、そのために自分に何ができるかなどを考える気など更々なかったことが分かります。

しかし、前述の記述の流れと比較すると、この奴隷は「目覚めていました」そして一応用意もしていました。

主人は、この奴隷の「言い分け」を言い分けにもならないこと示すために、「それなら、なぜ銀行に預けておかなかったか」と切り返しています。

この話しもやはり、飽くまで例え話なので、「預かった資金は何を意味していたか」「儲ける」

とはクリスチャンにとっての何を行うことを意味しているか」などと、意味づけをすることは、ほとんど無意味であろうと思います。

例えば、それが「改宗者を多く産み出すために、伝道奉仕に励むことだ」とか言ってみたとしても、「銀行に預けておく」つまり、それについて何の関心も努力も払わず、利子という不労所得を得る」事に当てはまる、クリスチャンの生活や、事象はいくら考えてもみつかりません。

やはり、これは、いくら「時のしるし」や世界情報と聖書預言にそれなりの注意をされていて、最低限自分の分を保っているというのでは、真に「目覚めている」とはいえず、「持っているもの」つまり、福音の希望や、それなりの信仰を持つてはいても、それらは無効とされ、クリスチャン失格という烙印を押されることになることを示している例えであると言えると思います。

神のご意志に敏感で、キリストの関心事に資すると思える事を日常的に示そうとするクリスチャンとして、生きた信仰を示しつつ、思わぬ時に訪れる主の帰還にも目覚めているべきというのが、趣旨でしょう。

さて、こうして預言的な三つのたとえを振り返ってみて、これらを総合的に考慮すると、別々に取り上げているだけでは気付かなかった点も見えてきます。

一つ目の「奴隷の例え」に、「**主人が到着して、そうしているところを見るならば、その奴隷は幸いです。**」(マタイ 24:46)とあります。「幸いです」と言われますが、主人は必ず、そうした奴隷を見いだすとは言われていません。いわゆる「希望的観測」です。

※ 希望的観測(きぼうてきかんそく)は、信念の一形態であり、証拠や合理性ではなく、「そうあって欲しい」とか「そうだったらいいな」という希望に基づいて判断を行うことをいう。一般に、好ましい結果が好ましくない結果よりもありそうだと予測することを指す。(wikipedia)

ここでは、2通りの状態の可能性を示しているに過ぎません。「もし…なら○○です、しかしもし…なら●●でしょう」という構文です。そして、その明暗を分けるのは「目覚めていたかどうかです。」とすることを知らせるために語られたものです。

一方「10人おとめの例え」では、「**彼女たちはみな頭を垂れて眠り込んでしまいました**」(マタイ 25:5)と述べられ、こちらは実際に生じることとして示されています。

全ては、「あなたの臨在」についての説明の中で語られているもので、当然、タイミングはみな同じ時です。

主人／花婿は到着時に「召使いたちに食物を与えているところ」か「頭を垂れて眠り込んでいる」かのどちらかを見ることになります。

もちろん、これらは、明確に預言として語られているものではなく、「たとえ話し」です。しかしだからといって、「明らかな矛盾」があってはならないでしょう。

結論的に言って、終わりの事を初めから告げる先見の能力を持たれる神のことばが、こうなるとの述べているのは、後者の方です。

ですから、実際の成就で言えば、「奴隷の主人が戻られたとき、あれだけ、注意勧告されていたにも関わらず、「そうしている「僕は」実は一人もいない。」というのが、現実に生じることだと預言されているのです。

ここで改めて、三つの例えを併せて一つの結論を述べてみたいと思います。

繰り返し、目覚めているようにと諭されていますが、結果的には、全てのクリスチャンが期待したほど十分に「目覚めていること」には失敗してしまう。しかしそうした状況で、忠実さや思慮深さがあるなら、主人の喜びに入る事は可能になる。すなわち、自分の考えた、或いは教えてもらったことに従った心づもりがあっても、現実には「予期しないことが起こり、思いがけない時である」という言葉を真剣に受け止めていれば、もし、聞いていたこととは違う状況になったりしたとしても、そのための「備え」をしておくという思慮深さがあるなら、成功するだろう。また、その時点で何をしていたか、していなかったかなどという、単なる一語に振り回われて、全体を見失ってしまうことなく、常に真の神のご意志、望まれることに焦点を合わせて培っている忠実さがあれば、必ず成功する。神の目的の成就を見張っているとは、おおよそこうしたことを意味するに違いありません。

キリストが捕縛された夜、目を覚まして見張っていなさいと繰り返し言われていたのに、悲嘆のために「眠り込んでしまった弟子たち」のように、大患難後でしかも、太陽、月、星など天が揺り動いているタイミングで臨在される状況にあつて、人間の陥りやすい弱点があることを知った上で、それをカバーするための用意、日頃の備えや蓄えをもって、信仰や勇気や忠節を保てるようにすることが、総合的に実質的な、実行可能な「目覚めた」状態を得させるものとなる。というのが、三つの関連した例えを話された意図ではないかと思えます。

さて、最後に、ものみの塔協会の、「自分こそが任命された「忠実で思慮深い奴隷」だ」という主張について、幾らかの調査とコメントを記しておきます。

先ず「10人のおとめ」とは誰か、そのうちの「賢いおとめ、愚かなおとめ」はそれぞれ誰かと言うことですが、ものみの塔誌にはこう記されています。

「十人の処女は、天の王国に入る見込みのあるクリスチャン、もしくは見込みがあると自称するクリスチャンすべてを表わしています。」—塔 90 4/158 ページ

そして、「賢い（思慮深い）おとめ」はエホバの証人であり、「愚かなおとめ」が誰かに関しては、年代によって違いがあります。

調べてみると、1974年辺りまでは、キリスト教世界の様々な宗派の信者と言うことになっていますが、その後10年くらいは、明確な記述はなく、1986年発行の書籍で、それは、1918年頃のものみの塔協会の分裂騒ぎで、ラザフォードに従わなかった一部の人々に変わっています。そして今日まで変わっていません。

なぜこうした変更があったかは何も説明されていませんが、推察すると、おおよそつぎのような背景が考えられます。まず、古い方の解説の引用から。

*** 千 11 章 194 ページ 23-24 節「さあ、花婿だ！」***

「西暦 1919 年になされた、天の花婿の見えない臨在に関する発表は、その花婿を迎えて、花婿の喜びにあずかりたいと願う「処女」であると自ら唱えた人たちすべてに挑戦をもたら

しました。「愚かな」処女に似ている人たちは、単にキリスト教を信じていると告白するだけの人びとです。…彼らは単にキリスト教世界における自分たちの宗派の宗教上の形式主義に従う名目だけの、つまり自称クリスチャンとして輝いているに過ぎず、死んだら天に行けると期待しているのです！」

これが、1986年になるとこう変わります。

*** 安5章43 ページ15節「事物の体制の終結」に関する啓発 ***

「献身してバプテスマを受けた仲間であると唱えていた人々のうちの一部の人たちは、霊的な愚かさを示し始めました。ものみの塔協会の初代会長チャールズ・テイズ・ラッセルの死後、それらの人々は、新しい会長 J・F・ラザフォードの監督する、エホバ神の見える機関と共に新事態に即応した精神を十分くみ取ろうとはしませんでした。」

これ以降は、キリスト教世界の各宗派は、完全に無視、論外で、マタイ25章の「10人のおとめのたとえ」の成就是100%「ものみの塔協会の内部関係者だけ」の出来事に終始します。

昔は、愚かなおとめであるキリスト教世界の宗派が、エホバの証人に「私たちに油を分けて下さい」と頼んだと言うことになっていましたが、これは、単なるものみの塔の妄想で、キリスト教世界がそうした事を申し出た記録も事実も何もないので、さすがにその主張を引っ込めざるを得なかったのでしょう。

*** 千11章194 ページ23-24節「さあ、花婿だ！」***

「しかし、彼らの経た宗教上の発展は、「さあ、花婿だ！ 迎えに出なさい」という夜半の叫び声上がる時、その挑戦に彼らに応じさせ得るものではありません。事実、1914年以來花婿が臨在しているという証明できる事実を彼らは認めませんし、受け入れません。花婿を信じており、教会はその花嫁であることを信じていると唱えてはいますが、彼らは自分勝手な仕方で、つまり自分たちの宗派に偏した仕方で花婿を迎え、またその喜びにあずかることを主張しているのです。」（アンダーラインは編者）

（どちらが「自分勝手な仕方で、自分たちの宗派に偏った仕方で主張している」かはともかくとして）そうなると、エホバの証人に「私たちに油を分けてください」と頼んだ人をどこから探してこなければなりません。当然どこにもいませんから、自前で備えるしかありません、そこで登場したのが、「集団脱退した（実際は追い出した）」人々です。

*** 鑑7694 ページ第1部—アメリカ合衆国 ***

「1917年と1918年の危機的な年に、どれほどの人が真のキリスト教を捨てたのでしょうか。全世界でまとめられた報告によれば、1917年4月5日に行なわれたイエス・キリストの死の記念式に2万1,274人が出席しました。（1918年には、組織内外の困難な事情のため、出席者数は集計されなかった。）また、1919年4月13日の記念式には1万7,961人が出席したことが、不完全な報告により伝えられています。正確ではないにしても、それらの

数字は、4,000 人よりずっと少ない数の人々が、神に仕えるかつての仲間と歩みを共にするのをやめたことをはっきりと示しています。」

世界的規模で生じる、キリストの臨在の際に生じる、退けられる「愚かなおとめ」についての聖書預言は、わずか4000人以下(単純に引き算すると3300人くらい)のごく少数の人々に成就したということになっています。

「王の婚宴の例え話」で結婚式の衣を着ていない人を外に投げ出したと言われた後、最後に言われた言葉ですが、「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ないのです」。(マタイ 22:14)

違うたとえですが、内容は同じです、キリストの花嫁として、選ばれる人は、招かれた人の総数と比較して圧倒的に少ないのです。

退けられた愚かなおとめは3300人ほどだということですので、その数に比較して、圧倒的に少ない数の人しか、「賢いおとめと」して婚姻の席に着けない分けですから、3割くらいだとすると全部で1000人くらいでしょうか。

だとすると1919年の記念式に集まった1万8000人ほどの内1万7000人ほどの人は、賢いおとめでも、愚かなおとめでもないことになります。彼らはどうなってしまったのでしょうか。

しかも、今日でも依然、「処女級」と呼ばれる人は1万人以上いてさらに増え続けていると言うのに、100年近い年月の間に全世界で1000人ほどの人しか選ばれないのですから、それらの人々はどう考えているのでしょうか。

さて、ものみの塔によれば、「花婿だ！」という声は1919年に上がったことになっています。このとき、彼らは活発に「その召使いたちに食物を与えさせているところ」をキリストに見られて、幸いな奴隷となりえたのでしょうか。それとも実際にはその時にはどんな状況が見られたのでしょうか。「ものみの塔」自身がこう認めています。

油そそがれたクリスチャンは物事をはっきり理解していなかったため、「花婿(は)遅れている」と考えました。困惑し、世からの敵意に直面して、全般的に手を緩め、組織的な公の伝道活動をほとんどやめてしまいました。たとえ話の中の処女たちのように、霊的な意味で言えば「頭を垂れて眠り込んでしまい」ました。—塔 04 3/1 14 ページ 7 節

したがって、1919年にエホバの証人が「そうしているところを」見ることは誰にもできませんでした。同時に、それ故に「忠実で思慮深い奴隷に任命された」というのも、根拠そのものが成り立たない故に、単なる勘違いか、あからさまな虚偽でしかありません。

そもそも聖書の記述からは、「忠実で思慮深い奴隷」とか「奴隷級」などと名付けて存在するグループの実体などは、実は何も預言されてはおらず、「クリスチャン」に関する実際に記されている預言や、関連したとえは全て「天の王国でキリスト共になる人々を召す」というもので、それまでに存在するのは、終始一貫「小麦と毒麦という真偽渾然とした、自己申告で自らをクリスチャンとした人々の集合(会衆)というこの二つの実体以外のものは何一つ言及されておらず、従って存在しません。「奴隷級」などという表現やイメージは「権力欲」に目が眩まされた人々の妄想或いは空想上の産物に過ぎません。